

青梅市文化財ニュース

第 3 9 1 号

令和 2 年 5 月 1 5 日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館(青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859)

青梅市立霞台小学校

この文化財ニュースでは、今まで創立年順に新町小学校まで紹介してきました。

前回・前々回ご紹介した河辺小学校や新町小学校は、明治の初めに村の学校として設立された後、第二小学校、第三小学校それぞれの分校となり、昭和 40 年代に改めて青梅市立の小学校となった歴史を持ちます。

今回ご紹介する霞台小学校は、これらの小学校と違い、青梅市が発展していく中で新規に設立された学校となります。

霞台小学校を紹介する上で、まず触れなければならないのが、土地区画整理事業でしょう。その辺りのことから振り返ってみたいと思います。

青梅市の土地区画整理事業は、東青梅地区の区画整理事業を皮切りに、河辺土地区画整理事業、霞台土地区画整理事業、三ツ原土地区画整理事業、新町土地区画整理事業と順次施行されていきます。これによって広大な畑作地域であった旧調布村の一部と旧霞村のかかなりの部分が都市化されていきます。広い道路が基盤の目のように建設され、計画的に市街地にするべく畑作地域が整備されていきました。

霞台土地区画整理事業の事業用地内にあたる青梅と入間を結ぶ町屋街道以南は、街道沿いに家が何軒かある程度で、青梅線まではほとんど人家がない状態であったため、事業は、急速に進みました。

そして、新しく建設された道路は、元々ある南北の道路より全体的に少し西側に向きを変え、河辺駅を中心に作られました。例えば、大門と野上町は、現在、青梅慶友病院から青梅街道野上の交差点へと続く道路が境界をなしていますが、区画整理が行われる前は大門 2 丁目の交差点から新町鈴法寺前交差点を結ぶ道路（一部霞台小学校と泉中学校の間の道が現存）が境界になっていました。

そのため、区画整理前、野上町 4 丁目にある青梅警察署は字師岡地内に、新町 1 丁目にある霞台小学校や若草小学校は字野上地内にありました。

また、この土地区画整理事業の区域は、概ね町屋街道以南青梅線以北、西側は東青梅市民センター西側道路で東側は大門交差点から新町鈴法寺交差点、さらに南へ行って、都営住宅東側の羽村市との境界の区域（いずれも青梅線以北）という広大なものでした。

さらに、この霞台土地区画整理事業では、他地区の区画整理事業と違い特徴的なことがあります。それは、公共公益的な都市施設の誘致を積極的に図ったことです。これらの施設用地には、新都市建設公社の所有地と保留地が当てられました。わかりやすく言

えば、霞台第1住宅564戸、同第2住宅444戸分の用地として、公社用地8haを提供し、住宅団地としています。同住宅には、昭和46(1971)年5月に入居が完了しました。また、警察署・消防署等の用地や中学校の用地も取得しています。さらに、昭和48(1973)年には、羽村市との境界に近い公社用地に都営住宅405戸の建設も始まりました。

前回紹介した河辺小学校は、昭和46(1971)年4月1日に開校しています。そこへ、新しくできた霞台住宅や野上町4丁目等に転居してきた子供たちが線路を超えて入学してきます。河辺小学校は当然、児童の増加に校舎の増築が追い付かなくなります。

このような状況の中、霞台小学校は、昭和50(1975)年4月1日、青梅市野上424番地の1に青梅市で13番目の小学校として開校します。霞台小学校の場所が第三小学校の近くに位置するため、ここから分かれたように感じられますが、実際は河辺小学校から分離した小学校です。この時、6年生は河辺小学校に通い続け、1～5年生の児童241名が河辺小学校から霞台小学校に移籍し、学級数8クラス、教職員14名でスタートしました。学区域は、新しく町名のついた師岡町3丁目あたりから都立青峰学園東側を南北に通る道路までです。

しかし、少し遅れて始まった新町地区の区画整理事業で事業が急速に進んだため、新町小学校の児童数が急増し、パンク状態に陥ってしまいました。そこで、霞台小学校との学区の線引きの見直しが行われ、現在、新町1丁目と2丁目の青梅街道より北側の地区（鈴法寺～新町桜株交差点までの間）は新町小学校ではなく、霞台小学校の学区となっています。

さらに、霞台小学校開校の3年後に若草小学校も開校し、南の方の学区も変わってきます。こうして、霞台小学校は、5年後の昭和55(1980)年には児童数は612名となり、その後、毎年75人平均で増えていきました。

このように、著しい発展を遂げた霞台小学校には、現在12学級373名の子供たちが通っています。創立45年目へと入った令和2年4月、新しく市立第三小学校より第12代佐藤広明校長を迎え、学校創立50周年の節目へ向けて教職員一同新たな伝統を積み上げるべく頑張っているとのことでした。

(文責 神森正)